

2025年度

第1回アドバンスト入試

時間50分 100点満点

国語

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 実施時間は50分で、100点満点です。時間配分に注意して解答してください。
3. 解答は解答用紙にていねいに記入してください。
4. 解答用紙・問題用紙両方に、受験番号、座席番号、名前を記入してください。座席番号は、机に貼ってある番号のことです。
5. 試験中は携帯電話の電源を必ず切ってください。
6. 私語や物の貸し借りなどは認めていません。困ったことがある場合は、手をあげて先生に相談しその指示に従ってください。

受験番号 _____ 座席番号 _____

名 前 _____

聖学院中学校

□ 一 次の間に答えなさい。

問一 —— のカタカナを漢字に直しなさい。

① ハリハリの穴に糸を通す。

② 店の派手なカ**ン**バ**ン**を目印にする。

③ 駅までかなりのキキヨリがある。

④ ススルドい目つきでにらまれた。

問二 次の(A) (B) (C)にはそれぞれ同じ言葉が入ります。空欄に入るもつともふさわしい語を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

①

・よき(A)を得る唯一の方法は、まず自分がよき(A)になることである。(エマーソン)

・(A)とはあなたについてすべてのことを知っていて、それにもかかわらず、あなたを好んでいる人のことである(エルバート・ハバート)。

②

・人が天から心を授かっているのは、人を(B)するためである。(ニコラ・ボアロー)

・(B)する——それはお互いに見つめ合うことではなく、いっしょに同じ方向を見つめることである。(サン||テグジュペリ)

③

・(C)のある者とは怖れを知らない人間ではなく、怖れを克服する人間のことなのだ。(ネルソン・マンデラ)

・優柔不断は疑いと恐怖を生み出し、行動は(C)を生み出す。(カーネギー)

ア、道具 イ、友人 ウ、元氣 エ、勇氣 オ、愛

② 図書委員を務める主人公（「佐竹さん」「あおちゃん」）は、あるとき司書の「しおり先生」から、生徒が書いた『おすすめおしえてノート』のリクエストに、応えるよう言われます。そこには、『女の子が主人公のお話を読みたいです。でも、恋愛、部活、友情、そういうのは苦手です』という「変わったリクエスト」が書かれていました。主人公はそのリクエストを書いた相手に共感を抱きながらおすすめの本を回答してあげました。それをふまえて、次の文を読み、後の問いに答えなさい。（「」や「」などの記号も一字と数えます）

なにか変わったお話を読んでみたくて、いつもの書架の前に立った。

① 図書室に入つてすぐ、受付の近くにあるこの小さな書架には、色とりどりの文庫本が収まっている。中学生に読んでもらいたい小説を、しおり先生が選んだものみたい。どれも読みやすく、十代の子たちが主人公だから共感しやすいと評判だ。

しおり先生だけじゃなくて、歴代の図書委員が選んだ本も交ざっているようだけれど、こうしてわかりやすく一つの棚に収まってくれるのはありがたかった。だって、中学生や高校生が主人公の本を探すのって難しい。ライトノベルなら簡単なんだけど、そうじゃない小説は、タイトルや表紙で当たりを付けて、いちいちあらすじを確認しないといけない。大人が主人公のお話は、なんだかついていけないから、あんまり読みたくない。

だからといって、恋愛ものとか、部活ものとか、そういうのは読みたくないから、この棚の中からでも、ピンと来る本を見つけるのは難しい。書架の前に立って、背表紙に書かれた題名を、一つ一つ心の中で読み上げる。色とりどりの背表紙、なんて言ったら聞こえがいいかもしれないけれど、この書架に収まっている背表紙の色は、みんなバラバラで統一感がない。あたしからするとそこは不満な点だった。大人たちから几帳面な性格してるって言われるせいかもしれない。

だって、この棚にある小説は、すべてタイトルの五十音順で並んでいる。だから本屋さんで見る棚みたいに、出版社とかレーベルとかそういったものでまとまってない。赤い背表紙の隣に黄色いのが来て、次は青になったりする。あんたは信号機かっつての。それだけならまだいいんだ

けれど、ライトノベルもよく交ざっているから違和感^{いわけかん}ははんばない。②ラノベの背表紙^{せひょうし}つて、イラストの一部分がタイトルの上とかに描^かかれてることがあるから、たとえば新潮文庫の隣^{となり}とかに来ると、めっちゃ浮^ういている感じがしちゃう。

去年の夏、両親に本棚を買^かってもらった。そこで几帳^{きちょう}面な性格が出^でたんだと思う。持^もっていた本を作家別^{さくしあべつ}に揃^{そろ}えたり、出版社^{しゅつぱんしゃ}ごとに並べたり、収^こまった背表紙の色^{いろ}合いが綺麗^{きれい}に見えるように、何時間^{なんじかん}も格闘^{かくとう}して、自分^{自分}だけの本棚を作^{つく}った。

だって、その方が見た目^めもいいし、目当ての本を探^たしやす^{やす}いじゃん。

「この棚^{たな}つてさ、どうして、作者^{さくしや}とか出版社^{しゅつぱんしゃ}とか、そういうのでまとめたりしてないの」

不思議^{ふしぎ}に思^{おも}って、しおり先生^{せんせい}に訊^{たず}ねたことがある。すると、しおり先生^{せんせい}は黒縁^{くろぐちめがね}眼鏡^{めがね}の奥^{おく}の眼^{まなこ}を、少し不思議^{ふしぎ}そうに「はちばちとまたたかせて、笑^{わら}って言った。

「それはね、本と出逢^{であ}うのに必要^{ひつやう}なのは、誰^{だれ}が書^かいたものかとか、どこの会社^{かいしゃ}が出^でしているかとか、そういうことじゃないからよ」

「けど、作家^{さくしや}さんの名前^なは？ 同じ人^{ひと}の書^かいた本^{ほん}を讀^よみたいって思^{おも}ったら？」

「そのときには、もう本^{ほん}との出逢^{であ}いを終^おえているでしょう？ 作家^{さくしや}順^{じゆん}に並^{なら}んだ書架^{しょか}で探^たせるはず。あとは、あおちゃんの本棚^{ほんたな}に収^こめたときに並べ^{なら}べてあげてちょうだい」

よくわからない。でも、この棚^{たな}は、どんな本^{ほん}を讀^よんだらいいのかわからない子^こたちが、タイトルだけで心^{こころ}にピンと來^きた本^{ほん}と出逢^{であ}うための場所^{ばしょ}なんだろう。

いま、あたしの目の前^{まへ}には、日焼^{ひや}けて何度^{なんど}も昔^{むかし}から讀^よまれたんだらうなっていう名作^{めいさく}っぽい小説^{しょうせつ}が、瞳^{ひとみ}が大きくて可愛^{かわい}い女の子^{おんなこ}のイラストに挟^{はさ}まれてちよっと窮屈^{きゆうくつ}そうにしていた。両手^{りやうて}に花^{はな}つてやつだ。男^{おとこ}の子^こならいいんじゃないと思^{おも}ったけれど、この子^こは女の子^{おんなこ}みたいだった。だつて、手に取^とって表紙^{ひょうし}の絵^えを見ると、女の子^{おんなこ}が讀^よみそうな雰^{ふん}囲^い気^きの本^{ほん}だったから。

新学期^{しんがくき}に、初^はめて借^かりる本^{ほん}はこれがいい。

あらずじを読むこともなく、直感で決めてしまった。

受付に持って行くと、奥のパソコンに顔を向けていたしおり先生が振り返った。

「あ、あおちゃん、決めた？」

「これにします」

日焼けした本を差し出すと、先生は黙ってそれを受け取り、けれどにこに嬉しそうに微笑みながら、貸し出し手続きをしてくれた。先生はあの棚にある本だったり、自分が読んだことのある本を生徒が借りに来ると、いつも嬉しそうに笑う。前に、どうして、そんなに嬉しそうな顔をするの、と訊いたら。

「だって、自分が好きな本を、好きになってくれるかもしれないんだよ」

だからって、嬉しいものなのかなあ。あたしには、ちよつとその感覚はわからなかったけれど、幸せそうに微笑むしおり先生の顔は、けつこう好きだった。

「それじゃ、帰ります」

「はい。お疲れ様でした」

先生に頭を下げて、図書室を出る。下校時間なので、図書委員のお仕事は終了だ。仕事といっても、受付に居座って本を読んだり、先生の仕事をちよつと手伝ったりしたくらい。いつも居心地がいいから、当番じゃなくても、ついつい来ちゃう。

③廊下を歩きながら、肩に掛けた鞆の中へ文庫本をしまいこんだ。既によれよれな感じだったけれど、鞆の中で擦れて皺がでえないよう、教科書と教科書の間に挟んでおく。

ほとんど人気のない廊下を歩いた。電灯が消されて、暗くなっている教室の前を通り過ぎたせいだろうか、それに気づくと少しばかり心細さを感じる。まさかお化けが出るだなんて、そんなことを想像したわけではなかったけれど。

突然、大きな声があがった。

びくりとして、肩が跳ねる。

もちろん、小説で読む物語と違って、なにか事件が起きたわけじゃなかった。ただ、耳に痛いくらい大きな笑い声をあげながら、女の子たちが階段を降りてきただけ。三人の女子が、きゃはははと大声ではしゃぎながら、肩を叩いたり、肘でつついたりして、じゃれ合っている。ただそれだけのことだった。けれどその無駄に大きい声は、どうしてなのか、あたしの身体を居心地悪くさせてしまう。

なにがおかしいのかわからないけどさ、そんな大声あげちゃって、ばっかじゃないの。

彼女たちの背中を睨みつけながら、歩く速度を遅くして、その三人組が通り過ぎるのを待った。それから、その中に見知った顔が交じっていったことに気がつく。一年生のとき、同じクラスだった三崎さんだ。

どうしても、あたしは彼女のことを苦手に思えて、たまらない。

(中略)

顔を上げると、すぐ目の前に、ここのとこよく観察していた人間が立っている。

三崎さんだった。

ぎよっとして、心臓が跳ね上がる。なんなの、いったいなんの用事？ ついに宣戦布告にでもやって来たの？ あんたたち陽ギヤ(※1)が、陰ギヤ(※2)の聖域を占領しようって算段なの？

「本を借りたいんだけど、どうしたらいいの」

「え、あ、えっと」

混乱気味に、カウンターを振り返る。こういうときに限って、しおり先生の姿はまだ見えない。間宮さんは読書に夢中で、こっちに気づかないふりでもしているみたいだった。他の一年生も、奥で掲示物を作る作業をして、背中を向けている。

「それじゃ、その、本と生徒証を――」

彼女が持っている本に眼をやって、言葉を途切れさせた。思わず呟いてしまう。

「それ」

あたしの言葉に、三崎さんは不思議そうな顔をした。

「借りられない？」

「えと……。そうじゃなくて」

彼女が持っていた本は、あたしがリクエストに応えて、『おすすめおしえてノート』に記した作品の一つだった。地味なタイトル、地味な装幀、地味なあらすじと三拍子揃っていて、この本を自分から手に取ろうと思う人間なんて、まずいないだろうと思える本だった。著者の名前だって

『さ行』なのかと思ったら『た行』を探さないとダメだったりして、とにかく探し出すのは難しい。④それなら、三崎さんがこの本を手にしていく理由は、一つしかない。

「あれ、三崎さんだったの」

「あれ？」

彼女は眉間に皺を寄せて、少し難しい表情をする。

「えっと、その、あれ」

あたしは、カウンターに置かれているノートを指し示した。すると、気がついたのか彼女は少し驚いたふうおどろに眼を開いて、それから俯いた。

「えっと、うん」

もしかしたら、恥ずかしかつたのかもしれない。せつかく匿名(とくめい) (※3) で書いたのに、こうしてバレてしまったら、たぶん気まずくなる。

「あ、ごめん、えっと、これ、勧めたの、あたしで」

「そうなんだ」

彼女は俯いたまま、顔を上げない。会話終了。気まずい沈黙(ちんもく) がやってきて、あたしは必死になって続ける言葉を探す。結局、黙ったまま貸し出し手続きをした。本の上に彼女の生徒証(せいとせい) を載せて、それを差し出す。

「はい。期限、二週間だから」

三崎さんは黙ったまま頷いた。彼女が本を受け取って、あたしの指先(さき) からその質量(しつりょう) が去っていく瞬間(しゅんかん)、慌(あわ) てて付け足した。

「よかつたら、感想、聞かせて」

振り絞(しぼ) るみたいにこの喉(のど) から出てきた声は、ここが教室(きょうしつ) だったら、たちまち騒々(さわさわ) しさでかき消(け) えてしまうほど弱々(じやくじやく) しいものだった。けれど、言葉(ことば) は奇跡(きせき) 的に届(とど) いたみたい。

「うん」

三崎さんは、手にした本を胸(むね) に押し当て(あ) てるようにして頷く。

心(こゝろ) なしか、その口元(くちもと) が笑(わ) っているように見えた。

⑤あたしは、本(ほん) を渡(わた) すために立ち上がった姿勢(せいし) のまま、図書室(としょしつ) を去(い) って行く彼女の背中(せなか) を黙(もく) って見送(みおく) っていた。緊張(きんちよう) のせい(せい) か、それとも別の原因(げんいん) があるのか、心臓(こゝろ) の鼓動(こどう) がうるさく音を立(た) てて、耳(みみ) の奥(おく) にまで響(ひび) いている。どきどき、していた。久しぶりの感覚(かんかく) だった。掌(てのひら) に汗(あせ) が湧(わ) き出て、胸(むね) が苦(くる) しくなり、頬(ほ) が熱(あつ) くなる。夢中(むちゆう) になって、物語(ものがたり) のページ(ぺいじ) を捲(めく) るときのよう。心躍(こゝろ) る冒険(ぼうけん) に、主人公(しゅじんこう) と共に旅立(たびだて) つときみたい、そういう不思議(ふしぎ) な感じがした。

気(き) に入(い) ってくれると嬉しいな、と思った。

「だって、自分が好きな本を、好きになってくれるかもしれないだよ」
しおり先生の言葉の意味が、ほんの少しだけ理解できた気がした。

（相沢沙呼『その背に指を伸ばして』）

※1 陽キャ…… 性格が明るく、人づきあいが得意で活発だとされる人の呼称。

※2 陰キャ…… 引っ込み思案で内気だとされている人の呼称。

※3 匿名…… 自分の名前を隠して別名を使うこと。

問一——①について、この書架にはどのような本が多く収められていると考えられますか。次の中から、もっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

- ア、中学生のうちに読んでおくべき日本文学や海外文学の本。
- イ、最新のニュースや流行をわかりやすく解説してくれている本。
- ウ、中学生や高校生が主人公で、身の回りの生活を題材にした本。
- エ、普段の生活を豊かにするような役に立つ知識が紹介しょうかいされている本。

問二——②について、次の問いに答えなさい。

- 1 主人公が本の並べ方で重要視しているポイントを文中より三字でぬき出して答えなさい。
 - 2 しおり先生はどのような考えをもって、このように本をバラバラに並べたのでしょうか。解答欄とくにあうよう一〇字程度で答えなさい。
誰が書いたものかとか、どこの会社が出しているかとか、そんなことにとらわれず、()、()という考え。
 - 3 主人公は「新潮文庫」の本に対してどのようなイメージをもっていますか。次の中から、もっともふさわしいものを選び、記号で答えなさい。
い。
- ア、たくさんの情報が収められている、分厚い本というイメージ。
 - イ、わかりやすい内容で、中学生が親しみやすい本というイメージ。
 - ウ、安価で、中学生でも気軽に購入こうにゅうすることができる本というイメージ。
 - エ、古い歴史と大きな権威けんいを持った格調高い本というイメージ。

問三——③について、この部分から、主人公の本に対する姿勢を読み取ることができます。それはどのようなものですか。解答欄にあらうよう
○字程度で答えなさい。

() とする姿勢。

問四——④について、三崎さんが「この本を手に行っている理由」を四〇字程度で答えなさい。

問五——⑤について、この時の主人公の心情としてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア、苦手な三崎さんと話すのはドキドキしたけど、うまく話すことができた。もしかしたら、これからは三崎さんと仲良くなれるかもしれない。
イ。

イ、自分の好きな本がやっと他の人にも読まれるようになった。これからもっとたくさんの方がこの本を読んで借りていってくれたらいいな。
ウ、自分の書いた文章を読んで、三崎さんが自分の好きな本を借りていってくれた。この本を三崎さんも好きになってくれたらうれしいな。

エ、三崎さんは話してみたらイメージと違って、とても真面目そうな人だった。人を見た目や日頃の行動で安易に評価してはいけないな。

問六 この文章を読んだ生徒がそれぞれ感想を話し合っています。それぞれの感想を読んで、後の問に答えなさい。

【Aさん】主人公はとても細かいことが気になる性格で、よく言えば真面目で几帳面^{きちょうめん}なんだけど、悪く言えば融通^{ゆうつう}が利かなくて、自分の考えとか思い込み^こを簡単には改められないんだと思う。ぼくは大雑把^{おおざっぱ}な性格だから、嫌われちゃうかもしれないね。

【Bさん】主人公と三崎さんの間にはどんな因縁^{いんねん}があったんだろう。主人公が一方的に苦手にしているようだけれど……。でも、三崎さんは主人公と仲良くしたいんだと思う。だから、わざわざ主人公のおすすめした本を借りようとしたんじゃないかな。

【Cさん】主人公はしおり先生の考えをなんでも理解できていないわけではないけれど、いつも朗らかなしおり先生のことを好ましく思っているね。大人と子どもというよりも、年のはなれた友達みたいな素敵な関係を結んでいると思うよ。

【Dさん】文章の表現上の特徴^{とくちょう}としては、主人公の視点で書かれた文章で、主人公の心情が率直に描かれているから、とても共感しやすいね。赤、黄、青の背表紙の並びを「あんたは信号機^{しんごうき}かつての」とか、かざらない言葉で書かれているので、思わず笑っちゃったよ。

問 文章の内容をふまえていない生徒の感想はどれですか。一つ選び、解答欄にあうように、間違えている生徒の名前を書きなさい。また、選んだ生徒の感想はどのような理由で間違っているとと言えますか。その理由を説明しなさい。

□ 次の文章を読み、後の問に答えなさい。「「や」」などの記号も一字と教えます

そのアメリカのコメデイは、代用教員のガービー先生が高校の教室に入ってくるところから始まる。

ガービー先生は、「私は二〇年も教師をしているベテランだから、じやまするなよ」と言って、名簿めいぼを手に出席をとり始める。

ガービー … ジェイクワリン（生徒はお互たがいに顔を見合わせているだけ）

ガービー … ジェイクワリンは、どこだ。いないのか？

（生徒は、あきれたように先生を見ている）

ジャクリン … （手を挙げて）えーつと、ジャクリンですか？

ガービー … ①（怒おこって）わかった。そういうことをするんだな。（教卓きょうたくを両手でたたく）

ふざけんな。

（ジャクリンを指さして）おまえには気を付けないとな、ジェイクワリン。

（名簿もとに戻もどって）バラケ。

（生徒、互いに顔を見合わす）

ガービー … バラケは、どこだ。今日は、バラケはいないのか。

ブレイク … （手を挙げて）ブレイクです。

ガービー … 頭がおかしいのか。（生徒の声を真似して）ブレイクです。

（ブレイクを指さして）けんかしたいのか、バラケ。

ブレイク … いいえ。（泣きそうな顔）

ガービー … 本気だぞ。

(名簿に戻って) デイナーニス。

これ以上、ばからしい名前を言うなら、このクラス全員に雷かみなりが落ちるぞ。

さあ、デイナーニスだ。

デニス … デニスのことですか。

ガービー … ばかやろう！ (膝ひざで名簿をたたき割る) 正しい名前を言え。

デニス … デニス。

ガービー … 正しい名前だ。

デニス … デニス。

ガービー … 正しい名前だ。

デニス … デニス。

ガービー … 正しい名前だ。

デニス … デイナーニス。

ガービー … そうだ。ずっと、ました。

この後もガービー先生は、名前を呼んでも生徒がすぐに答えないことに腹を立て、教卓の上にあつたものをたたき落としたり、校長の所に行くと命じる。②最後に、ガービー先生に「テイモシー」と呼ばれた生徒は、本当の名前は「テイモシー」なのだが、すぐに「はい」と答える。

ガービーは満足げに「よし」と言って、このコメディは終わる。

③このコメディの何がおもしろいのか。

おもしろさが伝わりにくいのは、私の日本語訳がへたなせいもある。それでも、ガービー先生が、生徒の名前を間違って呼んでいるにもかかわらず、絶対に自分の呼び方が正しいと怒り狂くるっていることは分かるだろう。

ガービー先生は、「ジャクリン (Jacqueline)」を「ジェイクワリン」と呼び、「ブレイク (Blake)」を「ブラケ」、「デニス (Denise)」を「デイナーニス」と呼ぶ。生徒が訂正するていせいと烈火のごとく怒りだし、先生の権力を盾たてに、自分の間違った呼び方を認めるまで怒鳴り続ける。

実は、このコメディのおもしろさは、アメリカで日常的に行われている「間違った名前を使う」という権力関係を逆転させているからなのだ。

アメリカの先住民や移民、そして、移民の子孫たちは、それぞれの人種や民族の歴史文化を背負った名前を持っている。しかし、④アメリカで生活していく中で、多くの人は、アメリカ人が発音しやすい名前で呼ばれたり、アメリカ人のような名前に変えられてしまう。つまり、自分の名前から、人種や民族の意味を「はぎとられる」経験をしているのだ。

「じゃあ、なんで正しい名前に訂正しないのか」と言う人があるかもしれない。しかし、頻繁ひんぱんに聞き直されたり、毎回、間違って発音されると、あきらめてしまう場合もあるのではないか。

そこで思い出したのが、以前私が飼っていた愛犬のことだ。子どもたちの名前の上の音をつなげて「ユソ」と名付けた。本犬(人も自分の名前が分かっていて、「ユソ」と呼ぶと、こちらを見る。見るだけで来ないところが、かえって、かわいい。

ところが、散歩に行くと、困ることがあった。

「かわいいワンちゃんですね。なんていうお名前？」

とよく聞かれるのだ。

「ユンです」

と答えると、かならず、

「えっ！ うそ？」

と聞き返される。

ある時などは、高齢の女性に名前を聞かれたので、いつものように、

「ユンです」

と答えると、おどろ驚いた顔をなさったので、

「やっぱりか」

と思っていたら、

「えっ！ ジュディ？」

と聞き返されたので、絶句してしまった。どこから「ジュディ」が来たんだろう？

その話を小学生だった息子にしたら、

「⑤だから、ぼくは、「ジョンです」って答えるようにしてる」

と、のたまう。

なるほど、「ジョン」だったら聞き直される心配はないし、ユンはそこまで人間のことは理解しないので、ユンが気分を害する心配もない。小学生でも、しかも、自分の名前じゃなく犬の名前でも、毎回聞き返されるのは面倒めんどうくさいのだ。だとしたら、アメリカに移民した人たちが、違う名前で呼ばれても、いちいち直さなくなる気持ちも分かる。

ここで重要なのは、どのような対応をするにしろ、対応を迫られるのはいつも移民や先住民の側だという事実だ。つまり、アメリカ社会の権力関係が、そのまま、だが、自分の名前から人種や民族の意味を「はぎとられる」かを決めている。

一方、冒頭のコメディで間違った名前と呼ばれているのは、いつもは名前を言い間違えている側の生徒たちだ。Jaqueline (ジャクリーン) も

Blake (ブレイク) も、Denise (デニス) も、どれもアメリカ社会の中核を占める典型的なアングロ・サクソン系の名前だ。⑥つまりこのコメ

ディは、移民の名前を言い間違えてきた人々に、ユーモアをこめて、名前を間違われる理不尽さを伝えているのだ。

コメディ引用部分の最後の、ガービー先生とデニスのやりとりが象徴的だ。「正しい名前」を連呼するガービー先生は、自分こそ何が「正しい」かを決める権利を持っていることを疑わない。

ガービー先生が、最終的に生徒を黙らせるまで理不尽に怒鳴りまくるのは、ひとつには、たかが名前に大きに怒ることによって、視聴者の笑いを誘っているのだろう。しかしそれ以上に重要なのは、これが、名前を間違われている側の人たちがひしひしと感じている無言の権力や圧力を表現している点だ。

実際の教室の場面では、移民の生徒が、先生に「私の名前は、本当は、こう読みます」と訂正したとしても、ガービー先生のように名簿をたたくき割って怒る先生はいないだろう。しかし、それ以前に、先住民や移民とアングロ・サクソン系の人たちのあいだには厳然とした権力の違いがある。ガービー先生の大立ち回りは、移民に訂正することすらためらわせる権力関係を文字通り体現しているのだ。

映画『千と千尋の神隠し』では、千が湯婆婆に雇ってもらおうと部屋に行くとき、湯婆婆は「千尋」という名前を奪って、あらたに「千」と名付ける。この場面でも、「名前を奪つ」ことが湯婆婆の絶対的支配を象徴しているのだ。

このように、ことばが持っている意味をはがす行為は、「意味の漂白」の一例だ。先住民や移民の子孫の名前をアメリカ読みにすることは、それらの名前に与えられている人種や民族の歴史や文化を洗い流してしまふ行為だ。それは、「外から来た人を見えなくする」働きをし、アメリカ社会にはさまざまな文化が混ざり合っていることを見えなくする。「名前」ということばを操作することで、社会を理解する枠組みを操作し

ているのだ。

実は、ガービー先生のビデオを見て、五〇年以上前に、中学生になって受けた英語の授業のことを思い出した。

先生がクラスの全員に、英語の名前を決めるように言ったのだ。それぞれが、メリーとか、ジョンとか、好きな英語の名前を決め、それを三〇センチ四方の紙に書き、三角形に折って立てられるようにする。

英語の授業になると、その紙を出して机の上に立てる。先生は英語の授業のあいだだけ、生徒を「メリー」や「ジョン」と呼ぶのだ。英語の雰囲気づくりとしてみんな楽しんでたが、まだ中学一年生で、「This is a pen」を習っている段階だったし、知っている英語の名前が限られていたので、何人かの生徒が同じ名前になってしまったりして、じきになし崩し的に使わなくなってしまった。

その後、この英語の名前についてはすっかり忘れていたが、最近になって、私よりずっと若い人が高校の英語の時間に、同じように英語の名前を使っていたという記事を読んだ。案外、授業中に英語の名前を使わされたという人は日本全国にいるのかもしれない。

記事によれば、このように英語圏以外の出身者が英語圏の人にとってなじみのある名前を使うことは「イングリッシュネーム」と呼ばれる。英語圏の大学にいる留学生などに多く見られる。⑦外国語の名前は英語圏の話し手にとって発音が難しいので、より親しみのある英語的な名前を別に持つのだと言う。

(中略)

イングリッシュネームに関しては、「コミュニケーションを円滑にするために有効だ」という意見と、「英語の名前を強制されているようで抵抗がある」という意見が見られる。後者の意見は、ガービー先生の例と同じように、必ず英語圏以外の人が英語の名前を使うのであって、その逆のケースはないという事実から来ているのだろう。

このような意見を尊重して、英語圏の人の中には、外国から来た人の名前を正しく発音しようと努力してくれる人もいる。一九九〇年代に滞在

していたカナダの保育園の先生は、子どもの名前だけでなく私の名前も正しく呼びたいと言って、真剣な顔で聞いてきた。

「あなたの名前を正しく呼びたいんだけど、正しい発音は、「モモコー」と「モツモコー」のどっち？」

先生は、傍線ぼうせんの「モ」を高く発音した後、じつと私の目を見て反応をうかがっている。

これには、まいった。どうやら、英語圏の人は、どれかの音を強調しないと話せないようで、平坦へいたんに「モモコ」という選択肢はなかったようだ。

そのどちらでもないと答えると、目を丸くして、それから、平坦に「モモコ」と言う練習が始まった。平坦に話すことは相当むずかしかったが、私に会ったたびに、平坦に言おうと努力したおかげで、驚くことに徐々に言えるようになった。

⑧その姿を見てうれしかったので、私も外国語の名前の人に会ったときは名前の発音を教えてもらい、何度も練習するようにしている。正しく発音できないことがほとんどだが、努力だけは続けたい。

(中村桃子 『「ことばが変われば社会が変わる」』)

問一——①について、ガービー先生は生徒がどんな「わるぶざけ」をしかけてきていると考えているでしょうか。次の中から、もっともわるいものを選び、記号で答えなさい。

ア、自分が点呼しているのを無視して、だれも反応しないというわるぶざけ。

イ、自分の呼んだ生徒ではない、別の生徒が返事をしようとするわるぶざけ。

ウ、自分の呼んだ名前を間違えあつかいして、返事をしないというわるぶざけ。

エ、自分が間違えたことを大きさに指摘して、馬鹿にしようとするわるぶざけ。

問二——②について、ティモシーはなぜ間違っている名前に「はい」と答え、本当の名前を告げなかったのでしょうか。その理由としてふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、ガービー先生のはつきりとした物言いに好感を抱き、別に名前を間違われてもいいと思ったから。

イ、ガービー先生の横暴なふるまいに腹が立ち、まともに相手をするのがためらわれたから。

ウ、ガービー先生のあまりにも自信に満ちた態度を見て、間違いを指摘することが気の毒だったから。

エ、ガービー先生の頑かたくな様子を見て、どうせ訂正しても聞いてくれないとあきらめたから。

問三——③について、筆者はこのコメディのどのようなところがおもしろいと考えていますか。その説明としてふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア、ガービー先生が生意気な生徒たちに屈せず、自分の考えを貫き、最終的には生徒たちを逆に打ち負かしていくところ。

イ、ガービー先生が自分の間違いを生徒たちから何度指摘されても絶対にそれを認めず、大げさなりアクションをしているところ。

ウ、二〇年も教師をやっているベテランのガービー先生が、若い生徒にかかわれながら悪戦苦闘しているところ。

エ、ガービー先生が内心では、自分の方が間違っているのかも、と思いながらも、それを認められずに意固地になってしまっているところ。

問四——④について、筆者はこの「名前を変える」という行為を問題があると考えています。「名前」にはどのようなものが含まれているかをふまえて、なぜこの行為が問題なのかをつぎのように説明しました。空欄部分にふさわしい文を二〇字程度で考え、文章を完成させなさい。

名前には、() が含まれているが、名前を変えるとという行為は、それらをはぎ取り、洗い流してしまう

行為だから。

問五——⑤について、「だから」という言葉の前には、ある文章が省略されていると考えられます。その文章を考え、三〇字程度で答えなさい。

問六 —— ⑥について、このコメディにおいて、筆者は、表面的でない「隠れたおもしろさ」があると考えています。それはどのようなところですか。次の説明の空欄部分に一〇字程度の言葉をおぎない、文を完成させなさい。

アメリカ社会において先住民や移民といった少数派が多数派から受けている（A）という理不尽な扱いを、ユーモアをこめて逆転させて描き、日常的にはそれを行っている多数派の人々が（B）を感じているというところ。

問七 —— ⑦について、「発音が難しい」とはどのような難しさですか、具体的に書かれた語を文中より二三字でぬき出し、最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問八 —— ⑧について、筆者はなぜカナダの保育園の先生の行為を「うれしい」と感じているのですか「尊重」、「対等」という言葉を使い、説明しなさい。

